

実は、柳田は明治に起こった三陸海岸の津波について、時々書いています。明治四十三年（一九一〇）の『遠野物語』には、遠野出身の男が田の浜に婿に入るが、大津波で妻子を失い、生き残った子供二人と小屋を掛けて一年ほど暮らした夏の夜、妻の亡霊に遭う話がある。妻はかつて心を通わせた男と夫婦になったと言うので、男は子供のことを口にするが、妻は泣くばかりであった。亡霊の現れる怪談であるが、この話には津波が引き起こした人生のドラマが集約されている。

昭和三年（一九二八）の『雪国の春』には、大正九年（一九二〇）、三陸海岸を徒歩で旅した際に、「二十五箇年後」という文章に、唐桑半島の宿という集落で聞いた体験談が載っている。この集落では四〇戸足らずのうち、一戸だけが残ったという。この話をした婦人はその時十四歳で、母親と乳呑み子もやっと生き残ったそうである。その後、臆病になって高台に上った者、食うが大事だと浜辺近くに出た者、他所から来て勝手に住む者などあったという。短い文章だが、津波から二十五年後の集落の様子を見事に書き留めている。

柳田自身のことでは、関東大震災は、国際聯盟委任統治委員としてヨーロッパにいて経験していない。むしろ、生命を脅かす危機を感じたとすれば、戦時中の空襲であろう。

昭和三十三年（一九五八）の『炭焼日記』に載った昭和二十年（一九四五）の日記には空襲の記述が頻出する。しかし、事前に敗戦を知ったときには、「いよいよ働かねばならぬ世になりぬ」と書く。柳田の学問は危機を乗り越えるためにこそ存在したのである。

今、もし柳田が生きていれば、未曾有の状況を前にして、やはり同じように言うのではないか。柳田は世の中の役に立たない学問には意味がないと考え、学問の意義を説きつづけたからである。そうした志は私たちが受け継がねばならない。八月の五〇年祭にしても、今回の災害とそれぞれ別の人生が向き合い、未来を拓く実践的な思考を促すことなしには意義がないと言ってもいい。

（三月二十九日）



福崎町文化協会の概要

吉 識 正 明



はじめに

無能無才の私は、その任にあらずという自覚を十分に持ちながらも六年に及ぶ歳月、伝統ある福崎町文化協会の会長をつとめさせていただきました。

その間骨身惜しまずご協力くださった役員の方々はじめ会員の皆様、また、ご支援いただいた町当局と教育委員会に厚くお礼を申し上げます。退任にあたり文化協会の概要についてまとめておきたいと思えます。

文化協会の設立

私たちの文化協会は昭和六十一年十一月二十二日、文化センター大ホールで設立総会を開催しその歩みが始まりました。

当時のわが国は戦後四〇年、中曽根総理の「戦後政治の総決算」を旗

印に、国鉄の分割民営化をはじめ多岐に渡る改革が進行中でありました。教育の面でも、臨時教育審議会は、高度成長期から成熟期へ、長寿社会へ変容するわが国の教育改革の原則として、「個性重視の原則」と「生涯学習社会の建設」の二点を答申しました。四半世紀余りを経過した現在も基本的にはこの方向に改革は進行していると思えます。

福崎町においても昭和五〇年代には、柳田國男生家の移築復元、松岡家顕彰記念館の完成、神崎郡歴史民俗資料館として郡役所を復元するなど歴史的な文化ゾーンが急ピッチで形成され、多くの町民の間にも「文化・文化財を大切にしよう」という気運の高まりがありました。昭和五十九年の町の総合計画（サルビアプラン）にもそのニーズに答えるため、教育文化の振興を大きく取り上げ、福崎町史の編集という事業も始めました。このような背景の中で、正に時宣を得て私たちの文化協会は設立されました。

設立の原点

従ってその原点は、福岡町の風土や歴史伝統をふまえ、この町固有の文化の継承と発展を目的とすることであり、以後多くの先輩の役員会員の方々の努力により今日まで引き継がれてきました。

他の市町の文化協会の多くが、趣味特技を同じくする人たちで結ばれた所謂公民館クラブの連合体として組織されている現状がありますが、私たちの文化協会は、それらとは独立した別の性格を有する団体であり、活動の中味も自ら異にするところが多いのがその特質です。

主たる事業

文化協会の事業は通例五月の総会と講演会で始まります。

七月には柳田國男生家とその周辺のクリーン作戦に参加し、同場所において小中学生による写生大会を実施します。これは、山桃忌を前に、近代の西洋文化の嵐の中で多くの弟子を育てつつ、その生涯を日本画に賭けた画家松岡映丘（松岡家八男）の画業を称えるための事業です。

続いて八月、山桃忌奉賛の短歌祭を町の短歌会と共催します。歌人としての柳田國男、並びにその兄（松

岡家三男）の宮中御歌所寄人として御歌始の点者もつとめた歌人、井上通泰を偲ぶものです。

秋の深まる十一月には会員による研修旅行で東へ西へ、有形無形の文化、文化財を見聞しながらお互いの親睦を深めます。

年明けの一月終わりには、町内の就学前の幼児、小中学生、高校生、大学生、勿論成人、高齢者の皆さんによる華やかなふるさと文化祭の開催。（一昨年の「福岡町文化」に秋武副会長により詳述されています。）



そして三月末には、役員会による当該年度の反省と翌年度の計画でしめくくりします。

特別な事業としては、平成十七年度協会創立二〇周年を迎え、道上洋三氏による記念講演会を開催、数多い社会事業についてスピーチにユーマアたっぷりのお話の後、文化センター大ホール満席の参加者による「六甲おろし」大合唱で皆さんに喜ばれました。

平成十七年、十八年の写生大会では、芸術活動で全国的に定評のある香寺高校美術部の皆さんを招待し、顧問の清田先生（現川崎医療福祉大学）のご指導もいただきながら町の小中学生たちは写生と展覧会ができました。



平成十九年十月には福岡町出身で作曲家、ピアニストとして東京中心に音楽活動を続けるマツオカ利久氏（松岡利久）のコンサートをはじめて故郷のエルデホールにおいて開催し、福岡高校同期の有志と文化協会役員が実行委員として協力しました。ヴォーカリストの楠田さん、清水さんの出演もあり、松岡君がその情熱を傾けている金子みすゞの作品など多彩なステージで充実した昼夜二部のコンサートが実現しました。

対外的なものとしては、平成十八年十月、西播磨文化協会連絡協議会との共催の形で「ふれあい文化交流会」を福岡町において開催し、私たちの活動をビデオで紹介した後、田尻地区の浄舞を鑑賞し、古典音楽芸術の研究者大渡敏仁氏による「近畿地区に伝わる王の舞について」と題する講演会を実施し、午後には伊藤館長の説明により柳田國男生家と記念館を見学、続いて出田学芸員の案内で三木家を見学し、西播磨地域より参加者百名ばかりに福岡町に伝わる文化、文化財の一部を紹介することができました。

また、平成二十年十一月には姫路市ウエルサンピアを会場に県内各地の文化協会の代表が集合し、「地域

文化を考えるシンポジウム」が開催され各地の実践と交流、翌日には、日本玩具博物館見学の後、わが町の歴史的文化ゾーンを県下多くの人たちに紹介する機会がありました。

P・D・Sのサイクル

文化協会の主催する事業のすべては、その広報から参加者の募集、運営、閉会に至るまでの過程を二十五名の役員が分担して運営しています。事業の終了直後には役員全員による反省会をもち、細かく評価（SEE）します。そしてその結果に基づいて次回の計画（PLAN）と役割分担を事務局長が調整し、事業を展開する（DO）というパターンを重視しながら活動を続けております。

その過程で、お互いに議論し、意見の対立もありますが、協会設立の原点、目的を役員全員がしっかり持つておりますので、結論が大きくぶれることはありませんし、それがはっきりしていることで常に自信をもって活動してくれていると自負しております。

三方よし

私たち協会の役員は、多くの事業を展開しながらその中味から自然に

多くのことを学んでいます。即ち無意味的に自分自身の生涯学習をやっていることになりました。

そして何よりも事業に参加する人たち、講師として選者として指導してくださる先生方との出会いから多くの人たちと人間関係を築くことができます。

また、事業に参加してくれる就学前の幼児から小・中学生、高校生、大学生の皆さんにとつては、学校園とは異なる環境で行われる社会学習の場となり、成長過程で一定の収穫が期待されます。もちろん目的をもつて参加される成人、高齢者には意図的な生涯学習の場を提供させていただいていることになり、皆さんの人生を彩る一コマになっていると思っております。

更にはまた、最近元気な町づくりには、その町の経済力と合わせて文化力を高めることが必須の条件であるといわれるようになりました。私たち文化協会の存在はこの側面からも若干の機能をしていると思っております。

平成十九年の会員研修旅行で湖東に残る近江商人の町を訪れました。かつての、どの居宅を拝見しても「売手によく、買い手によく、世間にも

よし、三方よし」の文字が眼にとまりました。この合言葉で近代商業の基礎を築いた人たちをお手本に、「私たち自身に、参加される方々に、そして町にとつても、三方よし」の理念でいつまでも文化協会の活動が継続することを願っております。

地域の文化力

私がかつて教職にあった時、全校生が運動部又は文化部のいずれかを選択して参加する部活動において、その数が余りにも運動部の方に片寄っていた現実には、全校朝礼で次のような講話をしたことを思い出しております。

「君たちが長い人生を歩むためには周りの人たちに活かしてもらうことが必要であり、同じように他の人を活かすことも必要です。」

お互いに協力して一つの目標に向かうすばらしさを教えてくれるのが運動部や文化部の活動であり、どちらも教科の学習と同じように大切です。

しかし、スポーツと文化はその性格上若干の違いがあります。

スポーツは、どちらかというとなりに重点をおき勝つことを目的として別の集団又は個人と争う世界です。

一方文化は、自分たちの表現やメッセージが見る人、聴く人に伝わり広がって共感してもらうことこそが目的です。文化部のよさももつと理解しよう。」と。

「物から心へ」。とみんなが言う二十一世紀にはいり一〇年がたちました。しかし、年間に三万人もの自殺者があり、所在不明の老人が多く、子どもの虐待の報道も続いています。

こんな不安と日常が隣り合わせの社会の中だからこそ、争うのではなく、喜びや感動を共にし共感を広げていくための文化力を、地域社会の中で高める努力をすることが、その地域に居住する住民にとって喫緊の課題であり、文化協会の使命でもあると思っております。

町民の皆さまの文化協会への更なるご協力を賜りますよう僭越なお願いを申し上げ在任中のお礼のことばとさせていただきます。

福崎町文化協会では、会員の皆さまを募集しております。

